

## 第6回 オンライン勉強会

実施日：2021/8/25 20:00～22:00

場所：Zoomミーティング

参加者：放鳥's 4名（うち1名獣医師）、獣医師 6名、他 10名 計20名

講師：谷藤典子医師（眼科医）

内容：ハヤブサ（野鳥）の白内障治療について

救護個体は眼外傷が多い。しかし鳥の眼科治療ができる獣医師は少ない。犬猫の眼科専門グループは都内に存在する。

鳥眼科が少しでも発展するためには人の眼科医の知識や技術が必要と考えた。今回は岩手県盛岡市の谷藤眼科医院副院長である谷藤典子医師を招き獣医師と意見交換をする場を設けた。

●鳥の眼の解剖と人の眼との比較について

●鳥の白内障の治療として、水晶体内のレンズ部分の濁りを取るのみ（人工レンズの挿入はなし）という方法がある。それでも通常の行動ができているため、見えているようだ。

●谷藤医師よりヒトの白内障の手術映像を使用し手術手技を解説

開瞼器で瞼を開いた状態に固定、麻酔は点眼薬のみ。

谷藤医師のレベル（所要時間約5分）になるには最低5年はかかるかと思う。（白内障の重症度による）

聞いた話によると、眼科の医師を呼び動物の眼科手術をすることがあるとのこと。

●雛フクロウの眼の濁りについて。

Q: 保護時より両眼が白濁していたが、次第に黒く澄んできた。自然と治癒することはあり得るのだろうか。原因は何だろうか。

眼Dr: 先天性白内障、急な眼圧上昇もしくははなにかしらの代謝の影響で白濁している可能性が考えられたが、特定できるものは不明。なぜ改善したのかも特定は難しい。（検査をしていないため分からない）

ヒトでこのように自然治癒することはあまりみない例である。

他獣医師も経験したことのない症例である。

●ハヤブサの白内障（右眼）

Q: 保護時より片眼にガラスが割れたような白濁があった。どのような原因が考えられるか。

眼Dr: 人間も強くものが当たった場合は白濁する。その場合は緩やか徐々に濁る。ものが刺さった場合はすぐに濁る。角膜は治っているが水晶体は濁ったままとなる。

ヒトでは極度脱水による水晶体白濁はない。

このハヤブサは外傷性の白内障のようである。徐々に白内障が進行してこうなったのではないかと考える。

Mさん：高齢のペットバード（インコオウム等）では点眼のみをしているケースはある。

手術は鳥のサイズの的に無理そう。見えない（見えにくい）なりに鳥は飼い主とコミュニケーションを取りながら生活はできているようだった。

#### ●機械のコストについて

眼Dr：中古市場が存在する。そこで探すと安価なものが見つかるかもしれない。

顕微鏡が一番高価。何千万円もするものも、場合によっては譲渡物件もあるかもしれない。

タイミングの問題もある。

#### ●鳥類眼科治療について

・PEAの介助をしたことがある。動物のほうが水晶体が硬いような印象だった。

・鳥へ眼科手術を行う場合麻酔管理担当者、執刀者の二人は確実に必要と考える。

・ハヤブサ、白内障単独での感染症はない。嚢が破けて中身が脱出すると、眼圧上昇、炎症を起こす場合がある。

・A：白内障摘出について。水晶体があまりにも硬い場合は乳化吸引せず摘出するほうが良いように思えるのだが、どうだろうか。（ECCE）

眼Dr：ECCEも手ではあるが、ナイロン糸で縫合するため術後2~3週間後に抜糸しなければならない点、角膜混濁、硝子体や虹彩脱出を起こす確率が高くなる点等を考えると侵襲が大きいので推奨はしがたい。

鳥の水晶体はヒトよりも球状。

内皮を傷つけてはいけない。

ドライアイの治療をしている。

・A：水晶体脱臼が原因で死亡したと思われるトラフズクがいた。眼窩外傷で死亡する事はあるか。外傷で搬送された個体。救護ケージ内で死亡していた。

眼Dr：水晶体脱臼のみで死亡することはないだろう。水晶体脱臼するほどの打撲があったのではないだろうか。いわゆる高エネルギー外傷。脳まで損傷していたのかもしれない。

Mさん：病理解剖は行ったか。脳の損傷も確認できる可能性がある。頭部外傷では慢性硬膜下血腫等、数日~数ヶ月たってから症状がでたり悪化する場合がある。死因としてはこちらのほうが妥当なようである。

→解剖はしていない。今度同じような事例があれば病理解剖を視野に入れたい。

#### ●その他動物の眼科治療について

・A：犬の脈絡膜腫瘍の事例について。最適な治療法は何だろうか。

動物の場合は眼球ごと摘出してしまおうが、そうすると眼窩が縮んで外見上の変化が大きい。ヒトの場合はどのような治療を行っているか。

眼窩にスーパーボールのようなものを入れて眼球の変わりにする場合もあるが、結膜等、覆うものが必要。

眼Dr：悪性であれば眼球全てを摘出する。

義眼は強膜に乗せるように装着するので、眼球全摘出の場合は使用できない。

眼窩を作る。

見た目の問題もあるが、悪性のものを残すわけにはいかないため、そこは受け入れてもらうしかない。

・網膜芽細胞腫

動物は審美的な問題視をされないことが多いがオーナーのショックが大きい。

ヒトの場合は強膜の一部を残し術後放射線治療を行う場合もある。

この場合は眼瞼、脈絡膜は発生が異なるので残すことかできる。（眼瞼は外胚葉、脈絡膜は中胚葉）

・A:35歳の高齢の飼育哺乳類。数年前から白内障が進行し、眼球内に膿がたまっている状態。

内部で腐敗しているようである。眼圧は測定できていない。点眼のみで経過観察をしているが、なにか良い手立てはあるか。

眼Dr：デュオトラバ（緑内障治療点眼薬）は意味がないと考える。オフロキサシン（抗生剤）は耐性ができるので長期投与は避けた方がよい。またこの状態では抗生剤は意味がないと思われる。

現在何か処置するとしたら4~20倍希釈のイソジンで洗浄する、にとどめた方がよい。

今後、角膜が破れる可能性はある。破れた場合は鎮静をかけ、スプーンで削り取る処置が必要か。

炎症が頭（脳）に波及すると大変。

もしも動物自身が眼をかきむしり、眼球が破裂したら2回/dayの洗浄を行う方向で考えてみてはどうだろうか。

ヒトであれば眼球摘出後シリコンボール挿入となるでしょう。